OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『西行物語』に描かれた西行像 : 文明本を中心として
Author(s)	山崎, 淳
Citation	詞林. 1992, 11, p. 31-45
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67317
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『西行物語』に描かれた西行像
―文明本を中心として―

山崎　淳

一

西行が後代の文人達、例えば二条・宗祇・芭蕉の憧憬の対象となったことは論を俟たないが、彼らの描いた西行像は、『山家集』等の歌集からよりも、むしろ『西行物語』に負うところが大きいと思われる。謡曲にも『西行物語』を下敷にしたものがあることを考えてみても、この作品が西行像を形成する上で果たした役割を見過ごすことはできない。従って『西行物語』の中に描かれた西行像を浮び上がらせることは決して無駄とはいえないだろう。ただし広本系・略本系・采女本系・永正本系と四つに分類され（1）、さらにそれらの系統下で多くの異本を生んでいる『西行物語』の中で、どの本をテキストに用いるかということは問題である。本論で主に用いるのは文明十二年奥書本（以下文明本）であるが、その理由として、これが祖本系とされる広本系の完本であることが第一に挙げられる。しかし文明本は、引用和歌にかなりの乱れがあり、四国の崇徳院の墓前で詠むべき歌を陸奥の藤原実方の墓前で詠ませるというミスを犯していることなどから考えると、決して原型とはいえない。それにもかかわらず文明本を取り上げるのは、個々の伝本における西行像を浮び上がらせることが『西行物語』全体の西行像を捉える上で必要と思われるからである。

二

『西行物語』には、鳥羽院の離宮から帰宅した佐藤義清が最愛の娘を「煩悩の絆」として蹴落とすという衝撃的な場面がある。これは伝本全てに共通し、西行伝説の中でも最も有名なものの一つであり、物語中最大の見せ場であったことは想像に難くない。

ところで、その場面の典拠と考えられている（2）のが『発心集』巻六「西行女子出家事」の冒頭部分である。ここでその

部分と文明本の場面を比較してみる。

文明本	発心集
としごろさりがたくいとうしがりける女子、生年四歳になるが、ゑんに出むかひて、ちゝ御ぜんのきたれるがうれしといゝて、袖にとりつきたるを、いとをしさたぐいなく、めもくれておぼえけれども、これこそぼんなうのきづなよとおもひとり、ゑんよりしもへけおとしたりければ、なきかなしみたることもみゝにきゝいれずして、うちにいりて、今夜ばかりのやどぞかしと思ふに、涙にむせびてぞあはれにおぼえける。	西行法師出家しける時、跡をば、弟なりける男に云ひ付たりけるに、幼き女子の殊にかなしうしけるを、さすがに見捨てがたく、いかさまにせんと思へども、うしろやすかるべき人も覚えざりければ、なほこの弟のぬしの子にして、いとほしみすべきよし、ねんごろに云ひおきける。
	（傍線稿者・以下同じ）

『発心集』には娘を蹴落とすという話はない。それどころか西行は、娘を自分の弟の養女にし、かわいがるよう懇ろに頼んでいるのである。それに対し文明本の西行は、少なくとも表面上そういうことを気にかけているようには描かれていない。この部分に関していえば『発心集』と『西行物語』の関係は希薄である。この話は『西行物語』以外では、『沙石集』巻三「顚狂人ノ利口ノ事」に、

西行法師初発心ノ時、最愛ノイトケナキムスメノトリツキタリシヲ、縁ヨリケヲトシテ遁世シテ後、心ツヨクステタリケルヨシヲヨミシモ、此心ニコソ。

世ヲスツルスツル我身ハスツルカハ　ステヌ人ヲゾスツルトハ見ル　（慶長古活字十二行本）

という叙述があるに過ぎない。『沙石集』には、この外に「西行ガ絵」という絵巻らしきものの名を記している説話もあるので（3）、おそらく右の説話も『西行物語』の一伝本と思われるその絵から取材したと考えられる。そうすると娘を蹴落とすという要素は、まさに『西行物語』独自のものといえよう。おそらく『西行物語』では発心の強さを現わすために、娘を人に預けるなどという要素は切り捨てられていると思われる。そして娘を蹴落とすという全く新しい要素が加わることで、『発心集』とはまた違う西行像を目指したのではないだろうか（4）。

さて前掲の『沙石集』説話において、西行の遁世は「心ツヨク」と評されている。実はこの「心づよし」という言葉は（5）、『沙石集』だけではなく文明本に数例用いられているのである。

・どれひのれつ座にぎしきをさだめつるほくめんはけふば

かりとおぼえて、―（略）―たゞいまをかぎりぞとおもひつゞくるに、涙もとゞまらず。されども心づよくおもひとりて、御うちよりいでゝ…

・さりとてもとゞまるべき事ならねば、心づよく思ひて、もとゞりをきりてぢぶつだうになげをきて、門をさし出て、としごろしりたりける聖のもとに、そのあかつきはしりつきて、出家をしけるこそあはれにおぼえけれ。

一例目は鳥羽院に暇乞いを許されなかった西行が出家の決意を再確認している場面、二例目は出家遁世の場面である。また、次の例は『発心集』の前掲説話の前半部とほぼ重なるので、合せて挙げておく。

（文明本）	（発心集）
かくまどひありくほどに、すみなれし古郷いかゞなりぬらん。我かなしと思ひながら、なさけなくけおとしたりしむすめの、さすがに心にかかりて、その門を過ぎけるに、見いれてたちたりければ、七、八ばかりにて、たてじとみのもとにてせんざいの花あそびするを、	かくて、ここかしこ修行してありく程に、はかなくて二三年になりぬ。事の便りありて、京の方へめぐり来たりける次に、ありし此の弟が家をすぎけるに、きと思ひ出でて、「さても、あり し子は五つばかりにはなりぬらん。いかやうにか生ひなりたるらん」とおぼつかなく覚えて、かくとはいはねど、門のほとりにて見入れける折りふし、此の娘いとあやしげなる帷姿にて、げすの子どもにまじりて、土にをりて立蔀の際にてあそぶ。髪はゆふゆふと肩の程に帯びて、かたちもすぐれ、たのもしき様なるを、
つく〴〵とあはれみ見る程に、このちご我を見つけて、こじきほうしの門にて見るがおそろしきとて、うちへにげいりぬ。かく我ぞとつげまほしく思へども、こゝろづよく涙にむせびて過にけり。妻子珍宝及王位のもんをくわんじて、み山のすまひぞよかるべき。 山ふかくさこそこゝろはかよへども　すまでこゝろをしらんものかは	「其れよ」と見るに、きと胸つぶれていと口惜しく見たてる程、に此の子の我が方を見おこせて、「いざなん、聖のある、おそろしきに」とて内に入りにけり。

三場面とも彼の仏道生活において重大な意味があったといえる。一例目は「主君の恩」、二・三例目は「肉親との絆」、つまり世俗との繋がりを断ち切る場面だからである。これらの重要な場面で「心づよし」が共通して使われているのは、偶然の一致とは思えない。特に『発心集』が典拠であろう三例目のそれは、おそらく文明本作者によって増補されたと考えられる。

ただし注意せねばならないのは、「心づよし」という語が必

ずしも現在の我々が感じるような良い評価を伴って使われるとは限らないということである。例えば『平家物語』等では「非情な・無情な」という意味で使われており、悪い評価も伴う語である。また、『発心集』の前掲説話の中には

うらめしかりける心づよさかな。武き者のすぢと云ふ者、女子までうたてゆゆしきものなりけり。

と名詞ではあるが、やはり悪い意味としての用例がある。先に挙げた『沙石集』の例にしても、前後の文脈からでは評価として、良いか悪いか判断し難い。

しかし、前掲の三例で描かれるのは、いずれも涙にむせぶ西行である。さらに後半のクライマックスの一つである娘出家の場面で、西行は都の「ゆかりある所」の人に娘の消息を聞いて「涙ぐみ」、しかし「きゝいれぬ」態度をとる。これらの例から考えると、西行は「非情」どころか、むしろ君恩や肉親の愛情を痛切に感じている人物なのである。従ってその恩愛と仏道修行の葛藤に悩み、それでも最終的には仏道を選ぶ彼に与えられる評価はプラスであるべきだろう。この様な評価を伴っていると考えられる用例として『今昔物語集』巻十九「春宮蔵人宗正出家語第十」の、

入道ハ遂ニ道心退スル事无クシテ、懃ニ貴ク行テゾ有ケル。世ニ極テ心強カリケル者トゾ人皆讃メ貴ビケルトナム語リ傳ルトヤ。

がある。この説話は、泣いて袖にすがる四歳の娘を宗正がなだめて出家するというものであり、前掲の西行が娘を蹴落として出家する話の類話といえる（6）。似た場面を持つこの説話が、その主人公に対し良い評価としての「心強シ」を用いているのは、注意してよいと思う。

それでは他の作品で西行に対してこの語を使っているものはあるだろうか。『保元物語』『発心集』『古事談』『十訓抄』『古今著聞集』『撰集抄』等にはない。この語を西行に与えているのは、今のところ『西行物語』と『沙石集』くらいしか見出せない。しかも『沙石集』で西行に対し「心づよし」が使われるのは先の一例だけなのである。また、『撰集抄』で直接本文に描かれている西行に、『西行物語』の様な人物造形は見られないといってよい（7）。ただし、『古今著聞集』巻二「西行法師大峰に入り難行苦行の事」には、次の叙述がある。

上人（西行・稿者注）道心堅固にして、難行苦行し給事は、世以しれり。人以帰せり。

さらに『十訓抄』では、在俗時に娘の死を聞いても動じなかったという説話がある。前者の「道心堅固」と後者の西行の態度には、「心づよし」に通じるものがあるのではないだろうか。『十訓抄』や『古今著聞集』が編纂された鎌倉時代中期を桑原博史氏は、

歌人として和歌に情熱を燃やした彼（西行）よりも、宗教人としての面がより強く取り上げられている。

と指摘されている（8）。この時代、西行に対し「道心堅固」

のような評価が広まっていたのかもしれない。そう考えると『西行物語』もそういう系譜にたつ作品であり、宗教人としての彼を理想的に描こうとしたといえるのではないだろうか。そして、宗教人という面に関して『西行物語』の西行像を規定しているのは「心づよし」ではないかと思われる。その「心づよき」性格ゆえに、彼は娘を縁から蹴落とすという挙にでたのであろう。

三

以上、文明本を中心に「心づよき」西行というものを考えてみた。しかし第一章でも述べたように『西行物語』は、数多い伝本を持つ。そこで各伝本において「心づよし」及びそれに関係があると考えられる表現、それらの使われる場面を纏めたのが次の表である。表中の「ナシ」は、場面はあるがそれに対応する表現がないという意味である。

	広本系				略本系			永正本系
	文明本	一生涯草子	徳・萬絵巻	白描絵巻	久保家本	伝阿仏尼本	渡辺家本	永正本
①院から退出（西行）	心づよく思ひとりて	こゝろつよくおもいとりしかば	（欠）	心つよく思ひとりて	ナシ	ナシ	こゝろつよく思ひとりて	心つよく思ひとりてそ
②蹴られた娘を見て（妻）	男には猶まさりける人にて	ナシ	（妻に関する記述なし）	男にハまさりける人にて	ナシ	ナシ	おとこにまさりたりける人にて	男にまさりたる、物なれば、
③出家（西行）	心づよく思ひて、もとゞりをきりて	心つよくもとゝりきり	ナシ	ナシ	こゝろづよくおもひきりて、自もとゞり…	こゝろづよくおもひきりて、みづから…	こゝろつよくおもひとりて、	ナシ
④娘と再会	こゝろづよ	心弱てハと	（欠）	（欠）	（欠）	（欠）	ナシ	心よわくて

（西行）	く涙にむせびて過にけり。	思て、涙にむせひてそ過にける、					はと思ひ、その門を、すきにけり
⑤娘と再会 （西住）	心よはくて仏になるべからずよな	心よハくてハ、仏のみやつかひハしてんや	（欠）	（欠）	（欠）	心よはからむには我同行にはかなはしとて	口惜、心よはき、人にて、おはしましけり…
⑥天竜の渡 a（西行）	心よはくもなくものかな。	心よハくもなく物かな	（欠）	（欠）	ナシ	ナシ	ナシ
b（入道）	心よはきにて候へども	こゝろよハきなみたハ	（欠）	（欠）	ナシ	いやしきものゝ心には	ナシ
⑦天竜から小夜の中山へ （西行）	ナシ	ナシ	（欠）	（欠）	心づよくも同行の入道おひすてたりけれども	ナシ	ナシ
⑧武蔵野 （隠者）	うら山しのこゝろづよさやとおぼえて	たゝしとくうらやましくおほえてえて	（欠）	（欠）	ナシ	心づよくも同行の入道おひすてたりけれども	うら山しのこゝろつよさよとおほえけり
⑨娘の出家 （西行）	ナシ	ナシ	（欠）	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ

⑩三人往生	男にもまさりて心つよき人にて	男にハまさりたる心つよきものにて、	（欠）	ナシ	夫には遙かにまさりけるこゝろつよきもの…	（欠）	おとこのをとらす	男にまさりて、ゆゝしき者也けれは、	と…
a（妻）									
b（娘）	心づよき人にて、	父母にもまさりたりける心つよきものにて、	（欠）	心たゝしくことからあさやかにて	一生不犯の身にて	（欠）	母にもまさりて心かしこきものなりけれは	母におとらす、心つよき物なりけれは、	

＊永正本⑤の後に「西住かなきけるを、心よはしと、うとみける、西行の心つよさこそ、たゝ人とは、おほえさりけれ」
＊渡辺家本⑩bの前に、高野に入った娘に対し「こゝろつよきものになりて仏智をとりてけり」

量的に見ると多少ばらつきはあるが、徳川家・萬野家本絵巻を除く諸本にこれらの表現のあることがわかる。また、ある系統独自に「心づよし」を含む場面もある。しかし注目すべきことは、決して西行のみに使われているのではないということである。実は文明本の特徴が顕著に現れるのが、その西行以外の人物なのである。そこで以下、脇役たちがどの様に造形されているのか、西行とどう関わっているのかを考察していく。

まず、⑤の西住はどうであろうか。彼は、吉野・熊野の旅を終えた西行が帰京する場面に登場する。

西住古郷に妻子あるところへゆきて、経をよみてたてるほどに、うちになきかなしむこゑきこゆ。女房すだれごしに見てなく。又うちより、よにけだかき四、五ばかりのちごはしりいでゝ、あのこじき我ちゝごににたるぞやといゝて、ふしまろびなく事かぎりなし。されども、つれなくきやうをよみてたちたるほどに、としごろ我つかひしおんな、しろき物をぬりおけのふたにいれて持てきたれば、衣の袖にうけて門をいづれば、うちよりこゑもおしまずなきかなしみければ、西住もかどをいでゝおびたゝ敷なきければ、西行つくゞゝと見て、はぢしめていはく、さればこそつれ申さじとは申しか。心よはくて仏になるべからずよな。―（略）―その心をもちては、我友にかなふべからずとて、其くれに鐘のこゑきこえければ、かくぞよみける。

またれつるいりあひのかねの音すなり　あすもやあらばきかんとすらむ

その夜のありあけの月あかゝりければ、

山かげにすまぬこゝろはいかなれや　おしまれている月もある世に

これは、第二節で挙げた西行の話（表④）の直後にあり、出家後幼い娘と再会し涙するという点で類話といえる。しかし両話には大きな相違がある。すなわち西行が「心づよし」、西住が「心よはし」と評されていることである。果たして西住は、同行の資格なしとして西行に突き放されるのである。この西住という人物は、西行の同行として有名である。彼の実像は、あまり資料がなく、よくわかっていないのだが（9）、『山家集』等では「上人」と記され、実際には西行から敬意を払われていたらしい。『撰集抄』でも「西住上人」と呼ばれており、西行が彼の最期を見とる説話までが収録されている。

ところが、『西行物語』における西住は、西行と対照させらることによって、完全にその引き立て役になっているのである。この⑤の場面が、娘の前を「こゝろづよく涙にむせびて過」ぎた西行を描いた④の場面と並べられていること自体、それを物語っているのではないだろうか。対照は、両話の最後に付された和歌からもうかがえる（10）。西行の方の「山ふかく…」は『新古今和歌集』一六三〇番、西住の方の「山かげに…」は一六三一番と並んでおり、おそらく直接の出典と考えられる。前者は「世間の人が山奥に住む私（西行）をどんなに思いやろうとも、住んでみなくては、私の心はわかるものではない」ということで、娘を振り切り山奥へと向かう彼の気持ちを語っているといえる。後者は「世を遁れて山陰に住もうとしない人（西住）の心はどういうものなのか、人々に惜しまれつつも姿をかくして山陰に入る月もある世なのに」という西住への非難と解釈できよう。

次に⑥の天竜川の渡し、西行が武士に額を打たれる事件に登場する同行の入道をみてみる。この話は、『十六夜日記』の「西行の昔思出られて」が示すように有名な伝説の一つだったと考えられ、出家時の話と同様に『西行物語』諸本に共通してする。また、⑤の話と後半はほぼ同じ型、同行を突き放す話となっている。西行の宗教的強さは顕著に現れている。すなわち自分を打ったのにもかかわらずその武士を拝んだことであり、彼は『法華経常不軽菩薩品』の不軽菩薩の行為を実践しているのである。その後、悲しむ同行を西行は咎め、二人は別れるが、その場面において略本系には独自の要素がある。

文明本	久保家本
このともなる入道これを見て、あながちになきかなしむを見て、西行申ていはく、心よはくもなくものかな。	此を見て、共なりける入道、なきかなしみければ、西行つく〳〵とまぼり、都を出し時、路のあひだにていか

さればこそつれじとはいゝしか。修行をせんには、これにまさることこそおほくあらんずれよな―（略）―誠のほつ心修行の心そみなば、のりうつともなにかくるしかるべき。我ともにはかなふべからずと申ければ、―（略）―つゐにいとまとらせて、はなち給けるこそあはれに侍れ。	にも心ぐるしき事あるべしといひしはこれぞかし。―（略）―自今以後もかゝる事はあるべし。たがひに心ぐるしかるべければ、汝は都へ帰とて、東西へぞ別ける。此の同行の入道も、西行がそのかみの有様ども思出て、今かゝる事見て心うく覚へけるも、理にこそ、哀なり。

略本系では傍線部に示したように同行と別れる理由が、この様な事件が「互いに心苦しい事」だからであり、西行（あるいは略本系作者）は入道に対して「理にこそ」と同情さえ示しているのである。この場面を桑原氏は「出家者としての自覚を持つ一方、なお情愛の豊かさを失わぬ」と評されている（11）。この「情愛」が続く⑦で、

西行、心づよくも同行の入道をばおひすてたりけれども、年来あひなれし者なれば、さすが名残おしかれども、

と語らせるのではないだろうか。表が示すように、ここで「心づよし」を使うのは略本系だけである。おそらくそれは、略本作者が入道を情愛の対象と考えたためであろう。

これに対し広本系は、西行が入道を同行の資格なしとして突き放す。略本系が「情愛豊か」な西行なら、こちらは悪く言えば冷たい人間とも受けとれる。しかし前掲話の二つ目の省略部分にある入道の、

あながちになき候事、心よはきにて候へども、君の在俗の御さきは近習の殿ばら、きたおもての座しゆくにては、諸人御めいをたがへじと、御まなじりをまぼりておぢおそれまいらせ、いさゝかのこともみつめばかりも、人にはいはれじとおぼしめして侍りしかば、在地の人ゝこゝをたつる事もなかりき。今か様にさん〴〵にうちまいらすれども、大事ともおぼしめし侍ぬことのあさましさになき候なり

という弁解を見ると、その内容は「過去への執着」であることがわかる。西行は過去（君恩・妻子・財産）を断ち切る事で出家を遂げたのだから、これは彼にとって全く説得力のないものといえる。従って入道に対し同情の余地はないのである。そのため同行に下される評価は「心よはし」なのであろう。また入道は、伊勢下向の際に出家した郎等で、文明本では、

あながちにともせんと申ければ、心ならずぞくしたりけり。

とされており、初めから西行とは相容れない人物として位置付けられていたと考えられる。彼も西住と同様、「心づよき」人間としての西行を描くため、対照として用意された人物といえよう。

ところで以上の二人の様に対照として登場しない人物もいる。⑧の西行が武蔵野で出会った隠者がそうである。この場面も、『発心集』巻六「郁芳門院の侍良、武蔵の野に住む事」が典拠と考えられている(12)。また、『撰集抄』巻六にも「武蔵野郁芳門院侍之事」で収められている。内容は、武蔵野に来た西行が昔郁芳門院に仕えていた侍という老僧に会い、一人黙々と仏道に励む彼の態度に感動するというものである。その最後部を挙げる。

このしばのいほりにすみて六十余年、法花十軸の読誦七万八千六百余部なり。—(略)—又十余日はむなしき時も侍れども、時〻いつくしき童子きたりて、雪の様なる物をくちへあたふれば、心ゆたかにて物ほしき事もなし。くらきやみの夜は火ともさねども、ひかり見ることありと語をきくに、涙にむせびて、うら山しのこゝろづよさやとおぼへて…

この老僧は真摯な仏道修行の証に、天の諸の童子が訪れるようになったということである。天の諸の童子は『法華経安楽行品』に記されており、特に『法華経』の持者が修行しているとその前に現れて給仕をするという。西行が涙し、羨ましく思ったのは、老僧のこのような境地ということになるだろう。しかも文明本では、ここに「心づよさ」という語がある(13)。「心づよき」西行が「うらやまし」と思うからこそ、この老僧にも「心づよさ」という評価が与えられるのであろう。『発心集』での該当部分は「うらやまし」だけであり、『撰集抄』では「ことにありがたくぞ」となっている。

さてこの場面にも略本系には、

西行も、郁芳門院の御事もよそならぬ御事なれば、たがひにかたり、苔のたもとをしぼり、名残はおしく覚えけれども、暁方立別るゝとて…(久保家本)

という独自の要素がある。西行が涙したのは、彼も老僧と同様、郁芳門院と縁があったからということになっており、それが文明本等の老僧を羨ましく思って泣いたという要素にとってかわっている。しかし『発心集』『撰集抄』、広本系等の様に、隠者の境地を素直に感心させる方がもともとの形であろう。この場面は、今まで取り上げた場面と同じく「宗教人」西行を描く上で必須の要素を持っているのだ。すなわち隠者によって西行の宗教心は確認されるのである。従って郁芳門院を媒体として二人に親近感を持たせる略本系の操作は、その点からいうと蛇足とも考えられる。

おそらく⑥⑦⑧における略本系の独自要素は、略本作者がこれらの話のポイントを捉えられなかった、あるいは曲解してしまったために生じたのではなかろうか。たとえ増補であるにしても、文明本が入道を初めから認めていなかったり、隠者に「心づよさ」という評価を与えているのは、むしろ妥当な認識といえよう。

以上の三人は、広本系の文明本と一生涯草子において叙述に

さほど違いはない。諸本を単純に比較すれば、各場面に対応する表現は文明本が最も整っているとはいえる。例えば④で「心づよし」を使うのは文明本だけである。しかし采女本系や永正本も内容において略本系ほどの違いは持たないのである。

ところが次に挙げる二人については、文明本のみ存在する叙述がある。一人目は冷泉殿、二人目は西行の妻である。冷泉殿は、西行の娘が出家するまで養母だった人物であり、前掲の『発心集』の説話でもやはり養母として登場する。両作品における冷泉殿の描写はほぼ同じといってよい。彼女は、自分に黙って出家してしまった娘の事を思い悲しむのである。しかし文明本と『発心集』にはそれぞれ違う要素が加わっている。

文明本	発心集
れんぜいどのはぢをすてゝ、我をいだきとりてこしらへ給やう、親のかなしき事はこの世ならず、さこそさりがたきことなれども、いまはこれほどいふにかいなき事なれば、我こそちゝはゝよ。我に心をなぐさみて候なん。さなき物ならば、我もいづちともなくうせんずるぞとおほせられて、御ひざのうへにかゝへて袖をしぼらせ給しを…	彼の養ひ母の冷泉殿も、後にはたふとく行ひて、もとより絵かく人なりければ、日々の所作にて、丈六の阿弥陀仏を書きたてまつられける。命をはりける時には、其の仏の御形、空にあらはれて見え給ひけるとぞ。

『西行物語』諸本に「冷泉殿往生譚」はないことから考えると、第二節での西行出家の場面と同様、この要素も切り捨てられたのであろう。しかも文明本の叙述は、さらに冷泉殿に一つの性格を与えるために増補されていると思われる。彼女は俗世に執着する人物なのである。確かに娘を引き取る場面と出家時に冷泉殿が嘆く場面は、涙を誘う所ではある。だが「はぢをすてゝ」という記述、同じく俗世に執着する西住や入道に対する「心よはし」の評価を考えると、彼女は文明本作者によって良い評価を与えられる人間とはいえないのではないか。彼女も西行と対照の位置にいる人物として登場しているように思われる。ただし、西行と冷泉殿に直接の対面はないし、彼女は西住や入道と違い出家もしていない。従って対照性は二人より希薄かもしれない。

そこで次に考察するのが西行の妻である。なぜなら、物語中冷泉殿の外に親しい者の出家に直面するのは彼女だからである。出家直前に西行が妻へ「としごろめおとこにあるべき事」を語る場面において、妻に関する記述が文明本と徳川家本絵巻で違うことは、既に坂口博規氏（14）や千野香織氏（15）によって指摘されている。その二本を挙げる。

文明本	徳川家本絵巻
今をかぎりと思ひて、としごろめおとこにあるべき事さま〴〵にちぎれども、この女房さらに返事することなし。	いまはかぎりとおもひさだめつゝ、こしかたゆくすゑのちのよまで、さま〴〵かたらへども、おんなはうらみもなげきもひとかたならずおもひみだれて、さらにものもいひやらず。たゞなくよりほかのことなし。

広本系の一生涯草子、采女本系は文明本とほぼ同じであり、略本系は徳川家本に近い。永正本にこの記述はない。また、白描絵巻（広本系）は、徳川家本に近いが泣くという要素がない。坂口氏は、文明本の妻が絵巻の様な「たゞなくよりほかのことなし」という女性ではない理由を、②の場面で彼女に対し、

女房は男には猶まさりける人にて、かねてよりおとこの出家せんずることをさとりて、このむすめのなきかなしむを見ても、おどろくけしきのなかりけるこそあはれに見えけれ。

という傍線部の性格が与えられているから、と説明されている。この「男にまさる」という要素は諸本で有無があるが、徳川家本を除いて傍線部以外の叙述は共通している。徳川家本は、この場面での妻の態度すら記してないのである。従って徳川家本と他の伝本の妻に、性格の隔たりがあるのは確実とみていいだろう。しかも物語最後部の妻往生の場面では、

さて西行がきたのかた、男にもまさりて心づよき人にて、―（略）―つねには無言にてぞおこないける。むすめのあまをぜんちしきとして、おはりの時日をかねてさとり、ねん仏千反となへていきやうしつにくんじ、心のまゝに往生をとげゝり。

となっており、統一がとられているようである。そして「心づよき人」とも語られているということは、妻は物語作者にとってプラスの評価を与えるに足る人物と見てよいのではないだろうか。ここで彼女の行動に注目してみる。彼女は西行の出家したその日のうちに出家し、一、二年は娘と住んでいたが、やがて遁世してしまう。この遁世場面（それは娘の口から語られる）に、文明本独自の叙述が加わるのである。比較のため『発心集』の前掲説話で、妻が娘を養女に出す部分も挙げる。

文明本	発心集
さても三とせ過て、またはゝかくいとまこう事もなくて、神な月のなかごろ、いとけなく心にまどろみてさぶらひしひまに、うせさせ	九条の民部卿の御女に、冷泉殿と聞こえける人は、母にゆかりありて、「我が子にして、いとほしみせん」と、ねむごろに云はれけれ

給にき、うちおどろきて、はゝとむなしき床をさぐりよべども、行ゑもしらぬかたにまどひうせさせ給ける	ば、「人柄も賤しからず、いとよき事」とて急ぎわたしてげり。

『発心集』の方は、冷泉殿が「母にゆかりある」人物で、妻は彼女の人柄を見込んで娘を預けたと読める。ところが文明本では、突然に失踪しているのである。この人物像の変化は第二章で見た西行出家遁世時における『発心集』からの変化と同質のものではないかと思われる。さらにむすめの出家時の告白には、次の叙述がある。

十二、三の年より、身の程おもひしられて、出家の心ざしふかく侍き。いまさいはひにその思をとげて侍りぬれば、二世ののぞみかなひぬ。これちゝはゝのおんなり。

一生涯草子・白描絵巻・采女本系にもこの叙述はあるのだが、いずれも出家できたのは「父の恩」であるとしている。「母の恩」でもあるとしたのは文明本だけである。「母」は単に並べられているだけかもしれない。しかし『発心集』からの変化と考え合わせると、意識的に増補したと思われるのである。そしてそれは、妻も西行と同様に「心づよき」人物であること、引いては行動・評価において妻は西行の分身として位置付けられるというふうに拡大解釈されていった結果といえよう。もう一人の肉親である娘が往生する⑩ｂの場面で、

むすめのあまもこ心づよき（ママ）人にて、往生のありさま目出度、心も言葉もおよばず。

と語られていることもこの傍証になるのではなかろうか。近親者の出家という同じ状況下で、取り乱した冷泉殿と、その逆の態度をとり、遂には出家遁世した妻。冷泉殿が文明本で恩愛に執着する要素を肥大させているのは、この妻との対照を意識していたからと考えられる。冷泉殿と妻に関する文明本独自の叙述が、西行と西住の話の様に二つ並べられる形になっていることもそれを示していると思われる。そして、もし妻が西行の分身であるという位置付けが許されるならば、冷泉殿は間接的に西行と対照させられているといえるだろう。

この様に『西行物語』の脇役は、西行の「心づよし」という性格を強める、あるいは確認する役割を持っているといえる。その方法としては、反西行的人間を西行と対照させること、別に親西行的人間（16）を描くこと、この二つが考えられるのである。そして多くの諸本の中でも文明本が、その傾向を強く持っているといえよう。「心づよし」と「心よはし」量だけでなく、使用場面との対応において最も整っているのはそのためではないだろうか。そう考えると一生涯草子の④、永正本の④の「心よはくては…」にあたる表現が、さほど意味が変らないのに文明本で「心づよし」になっていることは説明できると思う。すなわち文明本作者にとって、西行はあくまでも「心づよき」人物だったのである。

四

『西行物語』を読んだ者がその中の西行に対して抱く印象は、まず第一に「漂泊の歌人」としてのそれであろう。和歌を二百首余り含むこと、旅を中心とした構成、殆どの場面を和歌で締めくくるという方法は、そうした人物像を基盤としてこそ成り立つものである。

しかし『西行物語』は、宗教色が大変強い作品でもある。ただしこの作品における宗教色というのは、単にしばしば引用される仏教語や経文からくるだけのものではない。それは、主人公である西行や脇役達の行動そのものに最も多く帰せられるものである。第二・三章で挙げた場面を見れば、そこには具体的な形で各人の行動が描かれていることがわかる。特に西行の行動が、恩愛という世俗の繋がりと仏道との葛藤に苦悩し、最後には仏道をとる、という場面で極めて印象深く描かれていることは重要である。なぜなら、この「葛藤の克服」こそ『西行物語』の大きな主題と考えられるからだ。従ってその場で繰り返し使われる「心づよし」という語は、この主題と密接な繋がりを持っているのである。程度の差こそあれ、殆どの伝本にこの語があるということは、それを暗示しているのではないだろうか。

付け加えれば、本論文でテキストにした文明本は、冷泉殿や妻についての叙述を考えてみてもやはり原型とはいえない。しかし『西行物語』の主題を明瞭に意識していた伝本であるといえるだろう。

注

(1) 山口眞琴氏「享受と再編―西行物語の伝流と形成―」(『仏教文学』第十四号・平成二年三月)の分類による。

(2) 伊藤嘉夫氏「西行物語のたねとしくみ」(『跡見学園国語科紀要』第十二号・昭和三十九年三月)。

(3) 巻第五末「西行ガ事」。

(4) この様な違いは、『西行物語』の熊野修行と『古今著聞集』巻二「西行法師大峰に入り難行苦行の事」にも見ることができる。

(5) 「こころづよし」の清濁は、引用部分に関しては後述の引用書に従い、他の部分は「こころづよし」に統一した。

(6) 桑原博史氏『西行物語全訳注』(講談社学術文庫・昭和五十六年)にも指摘がある。

(7) 沼波政保氏「西行像試論―『撰集抄』と『西行物語』における異質性―」(『同朋大学論叢』第三十八号・昭和五十三年六月)に指摘がある。

(8) 前掲注(6)。

(9) 西住についての研究は、桑原氏「二人の西住」（『説話』第六号・昭和五十三年五月）、山村孝一氏「西行と西住」（『和歌文学研究』第五十三号・昭和六十一年十月）がある。

(10) 采女本系と永正本には、二首の和歌がない。

(11) 前掲注（6）。

(12) 前掲注（2）。

(13) 采女本系にも「心つよさ」はある。しかしこの系統は、広本系の影響下に製作されていると考えられ、後半部が詞書の寄せ集めの様になっていることなどから、文明本の方が先行すると思われる。

(14) 「『西行物語』の成立時期をめぐって―絵巻と物語の関係を中心に―」（『駒沢大学文学部研究紀要』第三十九号・昭和五十一年三月）。

(15) 「『西行物語絵巻』の復元」（日本絵巻物大成『西行物語絵巻』・昭和五十四年・中央公論社）。

(16) いわゆる「西行好みの人間」である。これについては西尾光一氏「西行的人間と西行好みの人間―『撰集抄』の仮托性―」（『文学』第三十七巻・昭和四十四年四月）。

なお『西行物語』の引用本文に関しては、

文明本・徳川家本・萬野家本・久保家本・伝阿仏尼本は久保田淳編『西行全集』（日本古典文学会・昭和五十七年）

西行一生涯草子は史籍集覧本

白描絵巻は宮次男氏「研究資料　白描西行物語絵巻」（『美術研究』第三百二十二号・昭和五十七年十二月）

渡辺家本は『西行物語絵巻』（日本絵巻物大成）

永正本は横山重・松本隆信編『室町時代物語大成第五』（角川書店・昭和五十二年）による。

また、『西行物語』以外の引用は、

『発心集』は「新潮日本古典集成」（新潮社）

『沙石集』は「岩波日本古典文学大系」（岩波書店）

『古今著聞集』は「岩波日本古典文学大系」（岩波書店）

『今昔物語集』は「岩波日本古典文学大系」（岩波書店）

による。

（やまざき・じゅん　本学大学院博士前期課程）